

研究家と云ふものは、徒に机上の議論をする丈で一寸も實地の研究を進めて居ない。毎月の兒童研究が幾何の新研究を吾人に齎すかと云ふに殆んど零である。云つても差支ない位である。吾人は我國の兒童研究家に向つて、大に奮起して貰ひたいと思ふ。

### 拙著幼兒教育法に對する

### 批評に就いて

和田實

吾人が幼兒教育法を公にしてより、茲に頃がても彼是一年に近からうと思ひますが、其間何處の方面よりも何等の反響もなく、會々口を開く人と云へば御世辭を振り蒔く様な人ばかりで、心私に不満に堪へなかつた。殊に幼兒教育を以て畢生の事業とし、幼兒教育家を以て安心立命の地位とすと言言する人々が、然も一言の之に及ぶものがないのは如何にも残念なことである。我國の幼稚

園社會には吾人以上の經驗を持たるゝ人や吾人以上の見識を持たるゝ人が幾等もある。斯る人は何故に吾人の意見に對して其批評を發表せぬであらうか。是は誠に不思議なことであり、且つは我國幼兒教育界の爲めに遺憾なことである。何となればお互に意見を闘はし思想を交換してこそ學問の進歩と云ふものは見出されるものであるのに斯様に會々問題を提出するものがあつても、更に論議しないと言ふことでは、到底進歩とか發展とか云ふことは出来ないからである。然るに、本年八月十一日實に該書の出版を去る約十ヶ月にして、幼兒教育法に對する評論が時事新報の文藝週報誌上に表はれた。著者の一人にして且起草者たる余は驚喜の眼を以て之を讀過した。讀過して然して長大息せざるを得ない、教育家又は教育學者ならざる文藝記者すら斯程迄に吾人の著述に對して多少の意見を發表するものを、幼兒教育界の一方に雄飛して幼稚園界の泰斗を以て自任せる人々は、なぜ思ひ切つたる批評をしないのであらうか、吾人は實に不愉快に思ふ、何となく糠に釘、豆腐に鎚

と云ふ様な感がして如何にも張合抜けの氣味で不愉快に思はざるを得ない、或は云ふ、女は遠慮勝で然う安らに批評は出来ないものだ、併し遠慮も度を通り過ぎては禮ではない。お互に研究的態度を以て同一の事業に従事する以上は、お互に意見を開陳し思想を交換することは當然の義務であつて、其間に何等の遠慮も入らぬ。否遠慮す可きものではない。然も、尙、遠慮して一言の批評の求めにも應じない、と云ふに至つては吾人は遂に其傲慢と執拗と陰忍とを悪まざるを得ない。此時に當つて時事新報文藝週報記者の評言は實に空谷の甕音で余は驚喜の感に満されざるを得ない。恰も陰鬱、濕潤の氣に閉ざされたる梅雨の空が轟々たる雷電の爲めに俄に一天を拭ひ去られしが如き感がある。いでや、余は其批評に對して大に反省して見やう。

文藝週報記者は先づ初めに本書の著者及び本書の組織に就いて紹介し、次に本書の内容に就いて痛快なる批評を試みた。今参考の爲めに其全文を掲げて見やう。

東京女子高等師範の中村教授及び和田助教授は、幼稚園教育の事に關して熱心なる研究者、又實際家なりと云ふ。今本書のごとく、其研究の結果を公にし、幼稚園教育の何者たるやを明かにし、或は之に過大の期待を爲し、或は其必要を認めざる一般の社會に教へ示す所ありたるは感謝に堪へたり。

第一編は總論にして、幼兒教育の必要、目的、方法等を論じ第二編に入り、遊戯を論じそれを經驗的、模倣的、練習的の三に區別せり。著者は幼稚園の職能は小學校と異なる教授にあらず、娛樂的遊戯的なりとす、依りて、斯く遊戯の研究を試みたるなり。第三編は教育の方法論なり。

上にも述べたる如く、本書は有益なる著なれども、全體としては、論ずるところ餘に高尙にして、幼稚園の保姆、または一般家庭の主婦に讀ましむるものとして、不適當の感なき能はず。次に幼稚園の教育は、嚴密には教育にあらず、遊戯なりとせむも、大體に於いて異存なきが、此區別を嚴守する爲め、遊戯の區別に多少無理の點なきにあらず。經驗的遊戯、練習的遊戯などは少く遊戯たる性質を失し居らざるや、如何にか。

遊戯の實質は、自發的の力にして、其形式は模倣なり、これだけに、幼稚園教育は十分に組織することを得べしと思ふ。尙ほ之と連貫したる問題なるが、幼兒は大人より教へんと欲して中々覺ゆるものにあらず、然るに同輩間に於ける感

化は頗る大なり、所謂交遊的性質を有す、其原理は、同輩間には模倣し易きにあり。故に幼稚園教育の、少くも大なる職能の一は好き交遊を保たしむるにあらざるべからず。本書には全く此方面の論述を缺く、少くも別に一編、或に一章を設けて、詳論する必要があるにあらずや、評者は之が研究を、熱心なる研究家、實際家たる兩氏に切望せんとす。

該書が高尚に過ぎて一般家庭の主婦及び幼稚園の保母に讀ましむるには、不適當の感なき能はずと云へる記者の言に就いては余は何等の反駁をも敢てすることが出来ぬ。余は一般の教育家は勿論一般家庭の主婦にも之を讀まれんこと（幼稚園の保母は云ふ迄もなく讀まれんことを望む）を望むものであるが、併し、若し果して該書が記者の言ふ如く六ヶ敷もの、又は高尚なるものならば一般家庭の主婦だけには止むを得ず、余の請求を撤去すべし。併し、一般の教育家には飽く迄も余は之を讀まれんことを請求するものである。該書は決して教育者たる素養ある人々には少しも六ヶ敷いものではないのである。尤も素養なくし

て幼稚園の保母を勤めて居られる方々には、多少六ヶ敷いかも知れんが是れは仕方がない。余は斯様な頭の理解力の少ない人に教ゆる積りで書いたのではなくて、目的は同一の事業に關係し、互に切磋の効を勵む人々と共同研究せんが爲めに吾人の研究の一端を公表したに過ぎないので、敢へて之を以て初歩の人の教科書たらしめ様としたのではないから是は誠に止むを得ぬことである。次に、記者は吾人が該書に於て

幼稚園の教育は嚴密には教育にあらず、遊戯なり。と論じたと云つて居るけれども是れは飛んでもない記者の粗漏である。吾人は斯る論議を該書の何處の頁に於ても論じたことがない。唯吾人は遊戯は教授即ち教育學中に所謂教授に非ず、と主張したのみで、幼稚園教育が教育でないなどと云ふ様なことは未だ曾つて夢にだも見たことがないのである。吾人は多少とも理論的研究を志して居るもので普通の論理は判つて居る積りである。幼稚園教育が教育でないなどと云ふ様な馬鹿らしい矛盾し

た考は毛頭持つて居ない。是は、何か記者の考へ  
 違だらうと思ふ。次に記者は吾人の遊戯の分類に  
 就いて不満を表されたが、是は御尤なることであ  
 り。吾人自身とても之を以て完全なるものとは思  
 はない。併し現在に於て是以上完全にして實際に  
 適切なる分類を教へて呉れる人がない。吾人は現  
 在の兒童研究上に於ては是を以て最も完全にして  
 最も實際に適切なるものであると思つて居る。併  
 し、學界は一日の撓みもなく進歩して行くから、  
 若し、後日是以上の分類が発見されたならば吾人  
 は直ちに此分類を捨て、他の分類を探る積りであ  
 る。けれども、記者の主張される様に單に「遊戯  
 の實質は自發的の力にして其形式は模倣なり」と  
 云ふだけで充分であると云ふ議論には無論賛成出  
 來ぬ。吾人が遊戯に關して比較的精細なる研究を  
 したと云ふものは、從來、斯様な淺薄な考を持つ  
 て居つた人があるから此謬想を矯めんが爲めに努  
 力したので、記者の云ふ如きもので満足が出来る  
 ものならば最早研究の必要がないのである。此點  
 は記者の一考を類はさざるを得ない。且又、記者

の言辭には誤りがある。吾人をして云はしむれば  
 遊戯の基礎は自發的の力にして其形式は模倣に  
 因り其實質は經驗的内容に因りて成立するもの  
 なり。

と云ひたいのである。併し是だけでは別段誤りが  
 あると云ふ譯ではないが、其淺薄なことは今も前  
 に述べた通りである。況んや是だけを以て幼稚園  
 教育を組織することが出来るとは空論も亦甚し  
 獨斷である。

最後に記者は

幼兒は大人より教へんとして中々覺ゆるものに

あらざる云々  
 と著者に對して希望せらるゝ所があつた。吾人も  
 頗る同感である。此點に關する研究は相當に力を  
 盡くして居る積りである。該書の方法論中には多  
 少之を述べて置いた。近著遊戯的手工の理論及實  
 際中には書物の性質上稍々之を重く論じて居る。  
 尤も幼兒教育法中に之を細論して幼兒の發達狀  
 況を明にしなかつたのは、彼は包括的教育學書  
 にはあらで、單に教育方法學書であるからである。

記者、希くは書名に注意されんことを。以上は拙著に對する文藝記者の批評に對しての余の感想を明にしたものである。余は世の教育家が無益な沈黙を守つて居る間に忌憚なき批評をされたことを切に文藝週報記者に感謝するものである。

# 幼稚園より小學校へ入學したる兒童の實際成績如何

京都市嘉樂小學校 藤田東洋

本篇は嘗て京都市教育雜誌へ掲載せられたるもの、友人某氏より態々寄せ越したるものである。方今、己が生みの子ある教育者すらも幼兒教育に冷淡なる秋、斯くも熱心なる研究を見るは痛快に堪えず。茲に之を諸君に紹介して研究の資料に供す。尙記事其物に關して吾人多少の異見あり。次第に於て述ぶる所あらん。(湘陽生記)

それ本題は最近の教育思潮に現はれたる問題にして教育當路者の深く研究を要する問題たるは論を俟たず現在に於ける幼稚園教育に於て満足すべき否や將亦改良するの必要無きや否吾人の近視眼を以て皮想的に否皮肉的に論及すれば大々の改良を施して保育の目的を達することに努力すべきなりと確信す或論者曰く「現在に於ける幼稚園は全廢すべし」とする所を認めず却て弊あるにあらざるやと「吾人は思ふ幼稚園は彼のフレibel氏の創設したる幼稚園の思想を受けて生じたるものにして家庭教育を補はん爲め必要なり」と所謂家庭教育又は幼稚園教育に於て幼兒の身體を健全に發達せしめ其力が健全に活動すべく養はれたらんには小學校に於て教授するに何等の差支なし其習慣的行動が善良ならば道德的陶冶は滑らかに進行することを得るは論を俟たざる所なり。然れども此の如き實際の保育がなされつゝあるものとすれば全廢論や改良論の聲を耳にすることなかるべし然るに世の識者は幼稚園を非難するにあらずや之れ其弊又は缺點の伏在せるを以てなり然